

科学と社会委員会 科学と社会企画分科会（第24期・第5回）議事要旨

1 日 時 令和2年9月15日（火）13:00～15:00

2 場 所 （オンライン開催）

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、高山 弘太郎（連携会員・副委員長）、
藤原 聖子（第一部会員・幹事）、川口 慎介（連携会員・幹事）、
遠藤 薫（第一部会員）、沖 大幹（連携会員）、高瀬 堅吉（連携会員）、
西嶋 一欽（連携会員）

（欠席） （全委員出席）

（事務局）船坂企画課専門官

4 議事要旨

（1）報告「学術とSDGsのネクストステップー社会とともに考えるためにー」の公表について

- ・ 藤原委員より、本報告の作成、幹事会による査読から公表に至る成立過程について経過説明がなされた。特に、査読段階においてSDGsのような外部要因により学術・科学が規定されることに対する議論があったことについて報告があった。

その他に次のような意見があった。

- ・ 期末での報告公表となったが、期の比較的早い段階で発出し、そこから本分科会としての議論をより深化させたり、フォーラムの開催につなげるというアプローチが可能であれば、より充実した議論ができた可能性がある。
- ・ 本報告の作成、とりまとめに尽力された藤原委員に感謝申し上げる。一方で分科会委員間の連携の充実という観点からは、本報告作成の過程でより協働的な連携も必要だったように思われる。
- ・ 本報告の訴求対象が主として次期（第25期）の後継分科会であるという点で、日本学術会議が公表する意思の表出としてはやや特異的なものであったことについての議論があった。
- ・ 学術会議の期（3年）のみで分科会の議論を完結させ、一定の意思を世に問うことの必要性和困難性について議論があった。

（2）次期（第25期）への申し送りに関する自由論議

大要、以下のとおり審議を行った。当該審議内容を踏まえ、次期（第25期）における審議に当たり有用と考えられる事項について整理し、申し送ることとした。

■本分科会の意義、役割について

- ・ 当初、本分科会のミッションとして「未来からの問い（日本の展望2020）」の関連審議があったが、当該審議のための専門委員会が別途設置されたため、本分科会の議論の方向性がやや不明瞭になった。
- ・ 一方で、本分科会の構成に若手アカデミー所属の委員と、シニア層に属する委員を混成したことにより、若手会員の意見を幹事会等に反映させる役割を果たした。
- ・ 逆に、本分科会での議論を若手アカデミーでも議論するような分科会等が成立しても良かったかもしれない。
- ・ 若手とシニアがどう連携すればいいのか、考える端緒となった。

- ・ 委員の人数が比較的少ないことにより、濃密な議論につながった。一方で比較的多人数であれば議論の多様化も期待できる。分科会の審議目的等により規模の問題は重要。
- ・ 開催頻度が比較的少なかった。回数を重ね、委員間の意思疎通が深化することにより充実する議論もあるので、次期においてこの点も考慮いただきたい。旅費問題はオンライン開催で解決できるが、ここで議論するような深い議論には対面議論（特に初期段階において）が必要。

■外部との連携について

- ・ 議論の成果を外部にどう反映させるかということを考えた時、訴求すべき行政機関を、議論の出口だけではなく、議論のプロセスの段階から巻き込むことが重要
- ・ 第24期においては、山極会長の学会会議の運営方針もあり、社会との対話、外部との連携が重視された。この一環で科学技術・イノベーション会議に日本学会会議の会員等が出席し、議論する機会を得たことは大変有意義だった。
- ・ 同じく山極会長は、提言等による日本学会会議の意思の表出を、抽象的な「国」ではなく、具体的な行政機関等に受けとめて欲しいという考えから、ターゲットの具体化に腐心された。
- ・ 課題や問題を共有するだけではなく、解決に至る権限を有する機関を議論に取り込むことは重要。日本学会会議という装置があればこそ取り込めることもある。
- ・ 問題解決を真に希求する場合、単に提言等を公表し、名宛ての訴求対象に届けるばかりでなく、要請文書としてその作成段階から各省や財務当局と協議・調整するような取組みが必要。
- ・

■若手アカデミーとの連携について

- ・ シニア層と若手が協働的に議論することにより議論が活性化し、社会に対してより有効な発信ができる可能性がある。独立性も大事だが、協働することも大切。
- ・ シニア層と若手研究者との間で、対立・利害が相反する課題が存在するが、シニア層と若手層の人にもよるのでその判断が重要。そうしたある意味共通的な課題に対して双方間の議論を戦わせる必要がある。
一方で、最後は価値観の相違に帰着する側面もあり、学術的な解が見いだせないこともあるが、解決の努力はすべきである。

■科学と社会のあり方について

- ・ 社会のための科学、科学のための科学ということに関しては、研究者間の価値観の相違や変遷、時代を背景とした社会の要請、研究を取り巻く環境の相違等の要因によって、変化が生ずるもの。
- ・ 様々な分野を代表する人の話を聞き、議論することにより理解が深まり、相互信頼も生まれる。そういう文脈においては、コロナの問題で急速にリモートでの議論が活性化したところではあるが、少なくとも期の始めには対面の機会を作り、信頼関係を構築することが必要。

以 上